The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在英日本人移民のCOVID-19 についてのナラティブにおけるアイデンティティ ： 語りに現れる被差別体験を分析する
Author(s)	秦, かおり
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88410
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

在英日本人移民の COVID-19 についてのナラティブにおけるアイデンティティ
––語りに現れる被差別体験を分析する––

秦　かおり

1.　はじめに

2020 年に始まった新型コロナウィルス感染症（以下、COVID-19）の拡大は、その発症地域についての為政者の発言やメディア報道などによってアジア系移民に対するヘイト／クライムを生み出した。本論文は、1）日本人移民が実際にどのような差別に遭い、それをどう表現するのか、2）また被差別意識に差がある移民同士は会話の中でそれをどう調整するのかをリサーチクエスチョンとして検証していく。これはその地域に住むこと以外が選択肢にない状況で社会の中に自らの立ち位置をどう確保し生き抜くかを明らかにする試みである。

2.　社会的背景

英国では、2020 年 1 月 31 日に初めて COVID-19 感染が確認された。他の欧州各国と同じくマスクをする習慣もなく、また中国という地理的に遠い場所の感染症という感覚があったため、初めて感染が確認された後も、人々が用心深く感染を避ける様子は見られなかった。しかし感染は拡大し続け、マスクはしないものの、人々はマフラーを口元まで覆うなど明らかな変容が見え始め、2020 年 2 月末には手指消毒液が店頭から消え、インターネット販売でもほぼ手に入らなくなるほど、人々の意識は変わっていった。

2. 1.　英国における感染拡大とロックダウン

そんな中、英国政府は 2020 年 3 月 24 日に完全ロックダウンを断行し、学校の全面休校、生活必需品を扱う店舗以外の休業、外出禁止、家族以外の集会禁止など、非常に厳格な完全ロックダウンを実施、それは 6 月 15 日まで継続した。英国はその後もロックダウンを解除しては再開を繰り返していく（１回目：2020 年 3 月 24 日〜6 月 15 日、２回目：2020 年 11 月 5 日〜12 月 2 日、３回目：2021 年 1 月 5 日〜3 月 8 日ロックダウン緩和開始)。

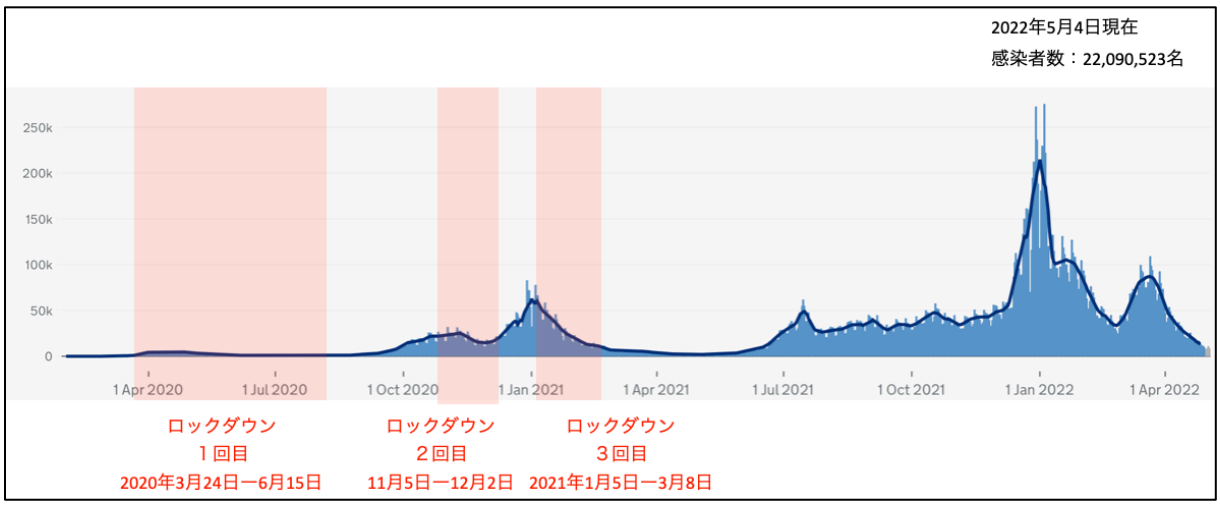

図 1. 英国のロックダウンと感染者数

しかし、図 1 から分かるように、当初のロックダウン中の感染者数と、その後 2022 年以降の感染者数の方が遥かに多い。これは重症化リスクや、予防接種の促進、経済状況の悪化などから政府が方針を転換したためである。人々の意識としても、感染者数の増大により自分や知り合い、家族が感染するケースが増えたことや、パンデミックが長引いたことによる状況への適応により、COVID-19 が正体不明の病からより身近で恐るるに足らない病へと転換していく。実際には、重症化リスクも、死亡する者がいなくなったわけでもなかったが、その状態が常態化することで麻痺していった実態は否めない。

政府も急に方針を転換したわけではなく、大々的に政策を転換する前にも、英国のロックダウンに Tier 制度を採用し、初回の完全ロックダウンから徐々に制限を細目化させていった。規制は以下のように 1〜4 段階で適用された。

レベル	概要
Tier 1	最大６人まで屋内・屋外とも自由に友人等に会える。
Tier 2	他世帯の人が屋内で会うのは不可。飲食店で同じテーブルを囲めるのはビジネス・ミーティングと屋外テーブル（最大６人）を除いて、同一世帯の最大６人まで。門限は午後 10 時から 11 時に緩和されるが、ラストオーダーは午後 10 時。
Tier 3	個人宅の庭に集まるのは不可。飲食店は店内での飲食は不可。テイクアウトのみ。
Tier 4	Stay at home。不要不急の外出禁止。生活必需品を販売する店舗以外は営業停止となる。

表 1. 英国ロックダウンの Tier 制度

Tier の適用は地域単位で、日本の都道府県単位と類似している。ロックダウンによる経済的な補償はある程度確保されていたものの失業者が増加し、また制約された生活が続き、国民の不満が蓄積する条件は整っていた。さらに、2020 年末にイギリスの Kent で変異株（アルファ）が発生、国内で新しい変異株が発見されたことで、不安も募っていたといえる。本研究の調査を行った時期（2021 年 4 月）は、3 回目のロックダウン解除後で、ある程度過去のコロナウイルス感染症についての体験を振り返る余裕が出始めた頃である。

2.2. 人種差別に基づくヘイトクライム

このような社会情勢を反映するように、ヘイトクライム（hate crime：差別犯罪）は増加していく。2019 年から 2021 年にかけて、ヘイトクライムは 27%増加、2018 年には 1,492 件だったヘイトクライム数は増加を続け、2020 年には 2,212 件となり、この３年間の犯罪件総数は 5,866 件となった（2021 年 10 月 7 日現在）。その中でアジア人へのヘイトクライム件数も急増傾向にある。2020 年 1 月〜9 月に発生した東アジア系住民に対するヘイトクライムは 457 件となり、前年同期に比べて約３倍の増加となっている。

以上で述べたように、英国内でのアジア人差別犯罪は COVID-19 蔓延に伴い、客観的事実として確実に増加している。そのような社会情勢の中で、アジア人である日本人移民は、それをどのように感じ、対処し、自らの社会的な立ち位置を確保したのかをインタビュー・ナラティブから読み解くことを目的とする。

3. 調査方法

本論文は、2010 年に開始された、英国在住日本人移民に対する縦断調査の一環である。英国で約 30 名の日本人移民に毎年縦断的に半構造化インタビューを行い、その音声・映像データを分析し、社会的変動と個人の生活、その中で揺れ動き変遷していく彼女らのアイデンティティを分析していく。以下の表 2 はこれまで縦断調査として行ってきた調査の概要である。

項目	概要
地域	ロンドン南東部を中心としケントなどロンドン近郊を含む地域
調査協力者	調査地域に在住し、原則として永住権を持ち、現地で結婚生活を送る日本人女性 30 名。
調査方法	アクティブ・インタビュー方式の半構造化インタビュー。複数（原則として２名）の調査協力者（以下、IE：インタビュイー）と調査者（IR: インタビュアー）の多人数会話を原則とする。質問項目はその時々の時事問題や社会情勢、関連する出来事（東日本大震災、Brexit、COVID-19 など）と自身の生活体験や感想、出産育児体験、メディア使用状況を主とするが、話が発展した場合はそれを止めず自由に会話を行う形式。

表 2. 縦断調査の概要

以上のような方法を採用して調査を積み重ねてきたが、COVID-19 の影響で渡英が不可能となり、2020 年については未実施、2021 年に関しては可能な限りのオンライン調査となった。

以下の表 3 は、本論文で使用した例の参与者情報である。

	職業	居住地	家族構成	COVID-19 関連
Y（IE 1）	パートタイム	ロンドン（南東部）	夫（英国人）子供２人	学校：現在は登校可、ロックダウン中は休校 補修校：ロックダウン中は休校 夫の状況：トレーダー：完全リモートワーク
S（IE 2）	パートタイム	ケント	夫（英国人）子供２人	学校：現在は登校可、ロックダウン中は休校 補修校：もともと登校していない 夫の状況：金融業：完全リモートワーク
K（IR）	フルタイム（大学教員）	大阪	夫（日本人）子供２人	2019 年 10 月-2020 年 3 月：ロンドンに滞在 学校：ロックダウン直前に日本に転校 夫の状況：自営業：完全リモートワーク

表 3. 本論文で使用した例の参与者情報

上記のインタビュー調査は 2021 年 4 月 21 日に実施された。COVID-19 の影響で渡英が不可能だったため、オンライン会議ツール Zoom を使用して遠隔で行われた。インタビュー当時、英国全体での 1 回目ワクチン接種率は約 62%、重症化リスク者、医療従事者に加え、45 歳以上が全員対象となっていた。Y と S はちょうど 45 歳を境に年齢が分かれており、Y は接種後、S は接種前であった（K は日本在住であり未接種）。この時点でのロックダウンレベルは最も規制がかからない Tier 1 で、旅行、集まり（6 人まで）、レストラン屋外での飲食（アルコール含む）が許されるまで緩和されていた。

以上のような社会的背景、調査方法によって得られたデータを、small story (Georgakopoulou 2007, Bamberg and Georgakopoulou 2008, 秦 2017）[1]の観点から分析し、語りのプロセスの中で、参与者が何をどのように表出させて協働構築をおこなっているのか、またその語りにおいて「差別」という観点から何が見えるのかを解明する。

4. 分析結果

4.1. 「アジア人」に対する差別とアイデンティティ

以下の抜粋 1 では、まずインタビュアーの K が、アジア人差別に関して、Y が住むロンドンと S が住むケントでは違いがあるかと質問をしており、それに対してそれぞれが差別にまつわる語りを開始している。

抜粋 1: インタビュー開始での前提の提示

01. K: なんかさ(0.1)あの:: ちょっと聞きたかったのが S ちゃんところ↑と=
02. S: [うん
03. K: [Y さんところって>あの<ちょっとその(.3)地域のカラーがちがうから::
04. S: うん
05. K: あの:: ニュースとかで流れてるの↑が: 結構アジア人差別があるとかっていうのが流れてくるけど::
06: K そ: れはロンドンとケント(.2)と(.)は違う?

上記の抜粋 1 では、S と Y の居住区域について「地域のカラーがちがうから::」（03 行目）と、最初から異なりがあることを前提とした投げかけをおこなっている。このことは、3 人の了解事項として、最終的に体験談や意見に共感を示したり、意見を一致させる必要がないという K から Y と S への語りの結論についての示唆ともなっている。さらに K は、「アジア人」（05 行目）と自分達が属するアイデンティティを設定しており、その体験談を聞こうといている。

それに対し、Y は自らが経験した被差別体験を語り始める。以下の抜粋 2 は、抜粋 1 の続きである。

[1] Small Story とは、「現在進行中のできごとについての語りや、未来や仮説のできごとについての語り、ほのめかしや語りを拒む語りなど、これまで言語学上は「語り」の定義から外れ、分析の対象とならなかったら新たな「語り」のカテゴリーの総称（Georgakopoulou 2006: 130）」である（秦 2017）。その機能として、前述の言説の例示、意見の補強、詳細な説明の追加、不均衡状態の是正、話の引き戻し、前言の撤回、事態の収束といった機能があると考えられている。

抜粋 2: Y の被差別体験談

07. (2.0)
08. S: Y さんあったよねぇ:: >なんか<コロナがさ: あの中国で蔓延してる時に
09. Y: 流行った( )
10. Y: >そそ<なったばっかり去年の(0.2)それこそ 3 月ぐら↑い
11. Y あの時は: デプトフォードマーケット行った時に: マーケットのおじちゃんが
12. Y: 中国人には売らないよ:: って
13. K: [hh
14. S: [腹立つ- @@
15. Y: 売らなければ? みたいな私日本人だから買うけ↑どみたいな
16. Y: @@@@
17. K: はは@@@@
18. S: @@&それびっくりしたわ:::&
19. Y: そ::: なんかまあそのおじちゃんと誰かがしゃ->コロナが何とかって<喋ってて
20. (.2)
21. Y: 私たち 4 人くらいで行ったのか↑な:: 日本人が
22. S: うん
23. Y: >そしたら<そんな感じで>まあ<半分冗談ぽいっていうか
24. K: ああ=
25. Y: =だったけど(.)
26. S: んん
27. Y: う:: ん
28. (.4)

Small Story 1

抜粋 2 では、質問からやや間があり（07 行目：0.2 秒）、S があらかじめ知っていたであろう Y の被差別体験を語るように Y に促している（08 行目）。それに呼応するように、Y はマーケットで「中国人には売らないよ」（12 行目）と店主に言われた体験を述べ、これに対して「売らなければ? みたいな私日本人だから買うけ↑どみたいな」（15 行目）と対応したことを述べ、自分が日本人であるから店主の指摘には当たらない、つまり自分は被差別対象ではない、と語ってみせる。

この体験談が暗喩していることは、この抜粋 2 の small story 1 に表出しているような COVID-19 にまつわる差別の構造に対峙した時、Y はイギリス人にとって一括りの枠だった「アジア人」を国籍別に差異化して「中国人」を被差別者として他者化（othering）し、それを容認することで、私たち「日本人」は差別される謂れはないと主張するストラテジーが採られたことを示している。つまり、ここで他者化を行い中国人に対しては「売らなければ?」（15 行目）と述べることで、結果として中国人に対する差別に関しては「ご自由にどうぞ」という自分とは関係がないものとして容認し、差別することそのものを悪を判断し抗おうとするのではなく、日本人たる自分を差別する理由はないと直接自分に向けられた差別は国籍が違うので誤った差別であると分断してみせている。

これに続いて、Y は「差別体験」について追加の small story を付け加える。以下の抜粋 3 では、Y から発せられた被差別体験談である。

抜粋 3: Y の他者の引用としての擬似的被差別体験談

29. Y:	とかまその当時いろいろ聞いたね: なんか(.)[そんなに	Small Story 2
30. S:	[最初んときね::	
31. Y:	コロナ::って言われたとかこう-こうやってこうやってあからさまに[こう	
32. K:	[あ:::	
33. Y:	マフラーをこうガーってやって	
34. Y:	>はい<って子供を連れたおばちゃんが>こっち来なさい<とか言ってこう	
35. Y:	うわ:::避けられて通ったとか::: なんかいろいろ(.)聞いた:電車-=	
36. S:	=それ H ちゃん? それ H ちゃん?	
37. Y:	いろんなお友達から↑ね	
38. S:	あ:::::	
39. Y:	nn 日本人の子にね	
40. Y:	電車に乗ったら席(.7)お前そこすわんないでくれって言われた::とか	
41. Y:	(.)ほんと去年の今くらいの	
42. S:	あ::	
43. Y:	nn 当初の	
44.	(.)	

上記の抜粋 3 では、Y が「その当時いろいろ聞いたね」（29 行目）と述べ、small story 1 での自分の体験は、自分だけのものではなく、当時はよくあった事柄であると設定する。「こうやってあからさまに」（31 行目）、「マフラーをこうガーってやって」（33 行目）という発話には、上体を大きく使ったジェスチャーをつけており、自らが体験した者の立場に立つ character-viewpoint（McNeill 1992, 秦 2020a）[2]によって語られている。このことは臨場感を増す機能があり、自らの体験と類似するの他者の体験を自ら演じてみせるという「被差別体験談」を補強する意味を持っている。また、その中で「日本人の子にね」（39 行目）として、small story 1 と同じく、「理不尽の差別される日本人」という構図を作り出している。ここでは、英国では「日本人」も「中国人」も結局「アジア人」としか映らないこと、それが原因で被差別者になることに対する抗いが見える。

続く抜粋 4 は、この被差別民としての「アジア人」枠に対して、イギリス人枠を設定し、差別の構造を転覆させるような仮想の被害者が登場する。

抜粋 4:「仮想の被差別者」としての S

45. Y:	でも今はもう-=	Small Story 3
46. S:	( )それ	
47. Y:	今[全然	
48. K:	[今イギリス変異株だしね	
49.	(.3)	
50. S:	そうですよ:::	
51. K:	@@	
52. S:	イギリスの方がやばいのに::: あの時ね:: もう許さない	
53. S:	[&うそうそ&@@=	
54. K:	[@@	
55. Y:	[@@	

[2] Character viewpoint: C-VPT とは、登場人物の視点に立ったジェスチャーであり、行為者（語っている人物自身）かあるいはそのほかの登場人物の視点を通して行われるジェスチャーである。語り手が登場人物に成り代わる臨場感のある語りを演出する（McNeill 1992, 秦 2020a）。

抜粋 4 の中で、今はイギリス発祥の変異株（アルファ）が流行しているため、イギリス人を「アジア人を差別する資格がない者」として設定している。そもそも中国発祥が考えられるからといって中国人を含むアジア人を差別するのであれば、イギリス人もそれを言う権利はなく、むしろ強毒化している変異株を発症させた「イギリスの方がやばいのに」（52 行目）と今はもうアジア人が差別される謂れはないという内容である。この語りの中で S は、「あの時ね:: もう許さない」（52 行目）と、被差別体験がないと述べていた S が、差別されたかのような発話をおこなっている。これは「仮想の被害者」(quasi-victim)であると考えられる。つまり、自分に実体験がなくとも、被差別カテゴリーに入っている人物の言葉を引用することで自らを被差別の枠内に入れ、被差別体験を話した Y に対する同調と共感を示している形となる。つまり、ここでは Y と S の間には被差別体験や知識量に相応の差があるが、それを違いとして示すのではなく、「仮想の被害者」となることで、同等の立ち位置に立つという調整を行ったといえる。

以上の流れの中で、次の抜粋 5 では、K が「アジア人」枠としての差別関連体験談を用いる。

抜粋 5: K の差別関連体験談

56. K:	でもね:: なんか>あの<R も: あの::: R-R が XXXXX に通ってる時は::	Small Story 4
57. Y:	あ::	
58. K:	>あの<何も言われなかったんだけど R 自身何か言われたってこと	
59. K:	>まあ言われても多分気が付かないんだけど::@R は理解できないから<	
60. K:	>でもなんか<先生から:: あの親宛に:: 何か(.)あの言われたら	
61. K:	差別的なこと言われたらすぐ報告してくださいって風に言われて	
62. S:	へえ:::=	
63. K:	アジア人(.)に対する差別があるっていうことを前提に先生たちが	
64. K:	>もう<対処する構え↑で(.)待ってるっていう感じだった	
65. Y:	[へえ::::	
66. S:	[へえ::::	

上記抜粋 5 では、K が自分の子供 R の学校の教員から「アジア人(.)に対する差別があるっていうことを前提に」（63 行目）学校が動いていたことを語る。実際の差別体験はないが、イギリス人の心の中で「アジア人は差別対象になる」という共通認識があったことが窺える。「もし～だったら」という仮定の中で被害者となる仮想の被害者（quasi-victim）であることを述べることで、被差別者たる自己を表出している。

つまり、ここまでは、実際に被差別体験がある Y、被差別体験はないが仮想の被害者として自ら発話している S、アジア人は差別されるものであるという前提で語りかけられた（ある種の）被差別体験を持つ K が、それぞれの story で共感を生んでいく形で語りが進んでいる。

4.2. 非共感への軌道

上記で述べたような、実際には立場の違いがあるにも関わらず、「語り方」によって共感を調整する語りに対し、以下の抜粋 6 では、学校内での出来事としてはそのような体験はないことを Y と S が述べ、非共感へ語りの軌道が修正されていく。

抜粋 6: Y の被差別体験談

102. K:	え(.)H ちゃんとこは?	Small Story 5
103.	(1.1)	
104. Y:	そんな通達は(.)何も(.3)こなかった↑し:: もちろんなんか	
105. Y:	H がなんか言われたってのもなかったし:: う::ん(.)なかったですね別に	
106. K:	[なんか	
107. Y:	[特に子供たちは	
108. K:	学校の中は(.)平和だったんだねじゃあ=	
109. S:	=うん 比較的平和だったんじゃないかな何も言ってこなかったもんね::=	
110. Y:	=うん そうそう	
111.	(.5)	

上記抜粋 6 の中では、Y が子供の学校では差別を前提とした通達はなく実際に差別に遭ってもいない、と述べており、また、S も「比較的平和」（109 行目）と述べて、108 行目から 110 行目まで、ラッチングを用いて畳み掛けるように「平和」を強調している。ここで 0.5 秒の沈黙が入り、この話はこれの前の small story 4 での語りに対し、非共感を示したままで終了する。

4. 3. 全員から遠い話題への飛躍

以上で見てきたように、small story 2 から 5 までのプロセスで築き上げてきた共感と調整は、small story 6 の登場で崩れてしまう。しかし、この対話の最後に、それらを全て覆す抜粋 7 が登場する。以下の抜粋では、パリについての語りという、今までの語りから考えて相当に飛躍したストーリーが語られる。

抜粋 7: S によるパリの語りとその共有

112. S:	なんかそれよりもパリが凄そうでしたよね相当=	Small Story 6
113. Y:	=あ:: 殴られたとか	
114. S:	[うん	
115. K:	[あ::	
116. S:	殴られたとか(.)でもなんかもしかすると今思ったんですよ(.3)	
117. S:	なんかこう(.)そういう風に(.)なんだろ(.)報道する(.)側が:=	
118. Y:	=うん	
119. S:	[ね?	
120. Y:	[うん	
121. S:	大袈裟に報道してるだけなのかな(.)わかんないっ	
122. K:	ああ	
123. S:	今一瞬(.)思った	

上記抜粋 7 では、最初に S が「なんかそれよりも」（112 行目）と、イギリスの例を凌駕するようなものとして「パリ」を挙げる。Y も「殴られたとか」（113 行目）と呼応し、また K も 115 行目で「あ::」と反応しており、「パリは凄そう」という点で 3 者の意見が一致する。その後、116 行目から、S によって報道が大袈裟なのではないかという意見が表示されるが、最後までイギリスの話には戻らない。ここで行っているパリにおけるヘイトクライムの話は、身体的な暴力が真っ先に挙げられていることに表象されるような、イギリスよりも「凄」いパリの状況を述べることで、イギリス対パリ（フランス）という構図にし、イギリス国内での 3 者の意見の違いや非共感を後景化させている。つまり、パリの話題を出すことは、SYK3 者にとって同等に関係のない地域での

出来事に話題を転換させたことになり、これにより 3 者が同等に遠い位置から発言可能となって意見や体験の不均衡状態を解除する機能を果たしている。

5. 考察

以上の分析を経て、本論文のリサーチクエスチョンを考察する。

5.1. 日本人移民が実際にどのような差別に遭い、それをどう表現するのか

日本人移民が実際に差別に遭っていたという事実は語りから実体験として、また他者の体験を通して語られた。その語り方については、COVID-19 にまつわる差別の構造を、イギリス人にとって一括りの「アジア人」枠を国籍別に差異化することにより、「中国人」を被差別者として他者化し、私たち「日本人」は差別されるに当たらないというストラテジーを採った。興味深いことに、ここでは差別という行為そのものの善悪は語られなかった。

5.2. 被差別意識に差がある移民同士は会話の中でそれをどう調整するのか

いくつかの体験談と語りの組み合わせを経て、small story 2から4では、実際に各自の被差別体験について（仮想の体験も含めて）共感と調整を行っていた。それに対し、続くsmall story 5では不均衡性を含んだ立ち位置を示し、互いの共感性を破るものであった。しかし、その不均衡性が明確になると、small story 6では、SKY３者が同等な位置に立てる別の話題に転換し、立ち位置の不均衡状態を正し、等しく共感を表す言語行動が観察された。ここでの不均衡是正は、体験や体験に基づく感覚の不均衡は根本的には解決されていないが、同等に遠いパリの話で共感を協働構築し、話題を終了していた。

これは、秦（2014）で東日本大震災の間接的被災者としての体験談、および秦（2020b）のBrexitにおける移民としての被差別体験談においても見受けられた。差別されるカテゴリーを自分の外に作り出してそれを他者化することで、差別されない自己を捻出、参与者同士も不均衡を解消する方法である。

以上のことから、社会的に足元の不安定さを孕んだ状況においては、何らかの方策を用いて自身の立ち位置を醸成し、多少不自然でもその場の参与者同士もそれに共感、共有して均衡状態に直す傾向があると考えられる。

6. 結語

本稿では、COVID-19 にまつわる差別を、日本人移民がどう体験したか、その体験の実態と語り方、および、会話参与者同士でそれをどう調整していくかという２点について考察した。これは世界的パンデミックのような差別を生み出しやすい社会情勢の中で、もともとマイノリティとして存在していた者が、新しい社会秩序の中で自らの立ち位置を確保し、その社会の中で生き抜いていく術、人間関係における方策を示していると考えられる。

このような自らの拠って立つ立場の確立は、他のあらゆる社会的危機や有事に適用できるのではないかと考えている。現在世界は、多くの人々がグローバル社会の中で世界的に移動を繰り返している。そのように人々が混在した状況の中で、ある意味「昔ながらの」紛争や戦争による分断が起こり、マイノリティは自分の足場の揺らぎを（ある時は生命の危機も伴って）感じる場面も多くなるだろう。その時、本論文で見たような対処法は世界を「正義」と「不正義」だけでは割り切れない、生き抜くためのディスコースの 1 つを示しているのではだろうか。

参考文献

Bamberg, M. and Alexandra Georgakopoulou. (2008). “Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis.”*Text and Talk*. Special Issue. Narrative Analysis in the Shift from Texts to Practices 28: 377–96.

Georgakopoulou, A. (2006). Thinking big with small stories in narrative and identity analysis. *Narrative Inquiry*, 16 (1) pp. 129–137.

Georgakopoulou, A. (2007). Small Stories, Interaction and Identities. Amsterdam: John Benjamins.

秦かおり(2014). 「国外在留邦人が語る東日本大震災 : 対面の場における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する 」『言語文化研究』40 pp. 123-142. 大阪大学大学院言語文化研究科.

秦かおり(2017).「コラム：スモール・ストーリー」鈴木亮子・秦かおり・横森大輔（ 編）『話しことばへのアプローチ— 創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦』東京： ひつじ書房. 249-452.

秦かおり(2020a).「語り（ナラティブ）とジェスチャー」『メディアとことば５　特集—政治とメディア』東京：ひつじ書房, 169-171.

秦かおり(2020b). 「Brexit を契機に顕在化した排除・調整・共感の中で : 在英日本人移民のナラティブを分析する 」『ナラティブ研究の可能性–語りが写し出す社会』pp. 75-96. ひつじ書房.

McNeill, D. (1992). Hand and Mind. Chicago: The University of Chicago Press.

資料

GOV.UK Coronavirus (COVID-19) in the UK (2022). The coronavirus (COVID-19) in the UK dashboard https://coronavirus.data.gov.uk/details/cases (最終閲覧日：2022 年 5 月 5 日)

CNN. 2021. アジア系に対するヘイトクライム、世界中に存在　新型コロナで一層悪化」 https://www.cnn.co.jp/world/35168178.html（最終閲覧 2021 年 12 月 3 日）

Southeast and Eastern Asian Centre. 2021. https://www.seeac.org.uk/hate-crime/#hate-crime-statistics (最終閲覧 2021 年 12 月 3 日）

トランスクリプト記号

[	オーバーラップ	£	笑いながらの発語
(.)	２秒以下の沈黙	=	続けて聞こえる発語
(0.0)	それ以上の沈黙	< >	周辺よりも遅い音
> <	周辺よりも早い音	[(( ))	ジェスチャー
__	強調表現	h	呼気
↑↓	音の上昇下降	° °	周辺よりも小さい音
-	いいさし	:	長音